

垂水史談会報

第 52 号
2023 (令和 5) 年
8 月発行

【報告】

橋口正徳家名品展を開催

市立図書館：六月一日～同三十日

この度、橋口家の文化財（書軸等）が市の指定文化財に認定されたことから、史談会と教育委員会の共催により「橋口正徳家名品展」を開催しました。

橋口家の家系図によると、初代・橋口兼有は寛永十三（一六三六）年、垂水島津家六代・忠紀が襲封する際に、本府鹿児島より垂水に入る、とあります。

その後、「橋口家は垂水家で物奉行、横目、山奉行、御納戸役などを歴任し、垂水家との深い関わりを持って来た家柄。特に納戸役（側役といい、側用人の代理をする。役目は1、御前向きは申すに及ばず、御側方支配のこと。2、御側講のこと。3、糾明のこと。4、星合方（出勤簿）のこと。5、御進物並びに御出物のこと。6、御客人方のこと。その他）によく任命されており、垂水家の執事、支配人のような家柄であったと伝えられる。さらに、明治維新後も引き続き垂水家に仕えていたらしく、大正三（一九一四）年の桜島大噴火の際には、東京で修行中の橋口兼安氏から親類の宮原景豊氏に宛てて、鹿児島市内の名家・垂水家の安否を尋ねる旨の葉書が残されている。」（橋口正徳氏談）

橋口家は藩政時代、鹿児島島の垂水屋敷の近くに居を構えて、垂水家の身の回りの世話をしていた家柄であったことから、政治家や文化人との重要な交流の接点になった結果、川口雪篷や高崎正風、鮫島白鶴、黒田清綱などの書軸などが残されたものと思われま



垂水史談会現地研修（新城地区） 6月25日

新城島津家の現当主・末川大四朗夫妻も参加

今年度から史談会で現地研修を行っていますが、第2回は新城地区の史跡や文化財を巡りました。

山田義之氏を始めとする史談会会員のほか、新城の郷土史研究会会員、そして鹿児島市からは新城島津家の末裔末川夫妻など約二十人が旧大隅線の新城駅に集まりました。



新城様の墓地、末川家の墓地、新城麓、石敢當、見晴し邸などを巡りながら、末川夫妻からも私たちの知らないお話なども聞くことが出来て、とても有意義な研修会となりました。

なお、8月の現地研修会は大野地区となります。25日（日）午前9時に大野地区公民館に集合してください。

令和5年度

『戦争のあったころのことを知ろう』展

市立図書館：八月一日～同三十一日

令和5年度の『戦争のあったころのことを知ろう』展を市立図書館で開催しています。

第二次世界大戦が終わって78年目に当たる今年には、昭和二十

（一九四五）年八月五日の「垂水大空襲」のほか、新たに、終国民学校生徒であった少年の証言記録や「垂水海軍航空隊」に勤務していた衛生兵の証言、さらに、戦地から垂水に届いた「軍事郵便」（分かりやすくパソコンで打ち直したもの）などを展示しています。是非、ご覧ください



西南之役 私学校生徒の従軍譚 ⑧

—立山健氏への聞き書き— (山口栄之 筆記)

可愛岳突破

可愛岳は最初当方のものであったけれども、捨てておいたので熊本鎮台が今度は占領して、本営を構えていることとなった。一体この山は一面がゆるい勾配で、他の一面が急に険峻な断崖となり、すこぶる要害な場所である。されば敵はこの要害をたのんで油断しておろうから、そこを突破しようというのである。

それは夜であった。逸見殿（へんみどん）が先頭に立って、その断崖の方から肅々と進むのであった。

そして枝折として暗夜にも目につきやすい白紙の札（えぼ）を所々に結びつけてある。それを頼りに一同枚（ばい）を含んで（声を出さないようにして）よじ登る。すると折からの雨空で、咫尺を弁ぜぬ暗夜のことではあり、敵陣近く忍び寄ったことでもあり、いつしか疑心暗鬼を生じ、前方にある一団の影を敵かと思つて逃げ出し、崖を踏みはずして落つる者もあつた。自分は幸いそんな目にも会わず、漸く頂上にとどり着いた。

《吉井嘉徳殿（どん）も落ちた人数のうちで、気絶していて目が覚めてみると朝八時頃で、崖の下に倒れているのに気付いた、と後に同人が語つた。》

頂上には早や敵影を見ず、山と積める兵糧の前で隊長連の豪快な笑顔に接したのみである。牛肉、魚肉、パン、餅、外套その他枚挙に遑（いとま）あらず、それを指して隊長が「みんなこれを背負がなる量かるえ」と言われたので、自分は餅、その他の食物と足袋を沢山取つた。そしてこれから山中を南へ向かつて歩くのであつた。途中で彼の分捕り品のご馳走を食べるのに、人に隠していないと奪い取られる虞（おそれ）があつた。それほど人心が浅ましくなつていた。

翌日、やはり山中であつたが、この時初めて西郷先生を見た。キチ縞の単衣を着て裸足で歩いていられた。狩で鍛えられた故か苦しそうにも見えず、また何ら心配そうな顔色も見えなかつた。《永井村に在りし薩軍数千、うち四、五百人のみ脱出。八月十七日午後十時頃より十二時頃までの間に、河野主一郎、辺見十郎太は前軍、桐野利秋、村田新八は翁の身边、中島武彦、貴島清は後衛。》

三田井口に突入

三田井口は官軍が固めていたけれども何かは恐れん、驀然（まっしぐら）に突入した。驚き狼狽する敵を瞬く間に切り散らしたそう、自分らが到着した時は夥しき鎮台兵の死骸が、庭にも座敷にもゴロゴロ転がっていた。また一人の敵兵を床下から引きずり出して斬るところもあつた。

ここでは沢山の米俵を分捕つたけれども、しようがないから悉く土地の人々に分配された。「薩州さんは偉（えれ）え」などと追従を言われた。（現金七千八百二十円、米二千五百苞、その他戦利品多し。）

ここで隊を前、中、後の三隊に分け、中軍で西郷先生を護衛することにたつた。西郷先生はここから駕籠に乗られた。

《八月二十一日三田井口、二十二日三ヶ所村専光寺、二十四日南郷、二十五日東米良、二十六日西米良、二十七日須木、二十八日小林となつているが、次の話はいずれこの内であろう。》

稗の飯

なるたけ敵の目に着かぬ所をとて、ただひたすらに山路を急いだ。ある日のことである。自分らの隊は中軍で西郷先生を護衛し

ながら、ちようど昼頃一つの山家に着いて、暫時そこに休息した。先生と二、三の幹部だけ座敷に在つて、我々はみな庭に尻を据えていた。どうもこの頃食物が十分でなかつたので、一同腹が空いてたまらなかつたのである。そこにひとり先生の前のみは一個の大きな鍋が持つて来られた。それを見た一同が浅ましいことには「あれは何であろう」と初めは私語（ささや）いていたが、一向こちらへは渡されぬので、遂に高声に「あれは何であろうか、食い物であろうに（あんなにいやらかい、くむんじやろが（転記者注））」と言つたのである。庭と座敷の距離わずかに二間余（約四メートル）、聞こえぬはずがあるものか、終始黙々としていられた西郷先生、ツト立ち上がつてその鍋を提げて来て、黙つて皆の前に下ろして行かれた。さすがに一同恐縮してただ眺めるばかりであつた。それは無論コメの飯ではないが、と言つて粟でなし、麦でなし、一種異様のものではあつた。後で聞けば稗飯（ひえめし）であつたそうである。

敵の士官に強いのが居つた

「長駆破竹の勢い」とか「猛虎群羊を駆るごとし」とかいふ形容はこんな時に当てはまるであろう。要所要所を固めた官軍を蹴散らしつつ遂に隅州横川に出た。ここで斬り散らした鎮台兵の死骸はみな焼棄した。

蒲生に達した自分たちは前軍であつたが、官軍を駆逐しつつ吉野越えに近くなつた時、逃ぐる官軍の中から一個の士官が振り返つて、サーベルを打ち振りつつ追いつがる者らをバタバタと斬り倒すのであつた。それに恐れて近づくかぬようになればまた逃げて行く。追いつく程になるとまた振り返つて「ドッコイ、ドッコイ」と掛け声をして斬りまくる。ために味方の倒るるもの少なからずあつたけれども、「あつぱれ、惜しき勇士ぞ、決して鉄砲で撃つな」とこちらは制し合つたのであるが、やはり心なき奴が遂に撃ち倒してしまつた。そしてその手帳を探り出してみたところ、これは鹿児島高麗町の田中某という人であつた。道理で強かつたと、皆感嘆した。

逸見殿（へんみどん）先鋒を譲らず

吉野の涼松の茶屋で休憩した。ここで前、中、後の隊の繰り替えをする予定になつていたので我が隊長・逸見殿が「是非このまま前軍で置いてもらいたい」と言い出したが、隊のもの一同も「ウンそうそう前軍で行きたいものだ」と、勇まし気に声援して、さて顧みて味方の者どもと顔を見合わせながら、小声になつて「馬鹿な今更、何の功名ぞ」と嘲つて舌を出した。ああ、長い間の戦苦に飽き、敗軍また敗軍、漸く末路に近づいて全ての希望は絶え、為に軍紀弛み隊長の威令も衰えたのであろう。今や一葉落ちて天下の秋を知る季節で、何となく心細いようであつた。それでも脱走者は一人もなかつた。

（以下次号）

—たるみず春秋—

お別れは蓮咲く寺であつたはず

篠原和義

友人の死に立ち会うことが多くなつた。

蓮の咲く頃には、静かな山間の小さな寺でのお別れを思い出す。この人はいつも楚々とした女性であつたが、確か、寺の池には蓮の花が咲いていたように覚えてる。

（季語：蓮・夏）

（文章：瀬角龍平）